

## 中国近代教育の発生と私塾 —— 中国間島における近代的学校の発生 ——

梶木 瑞生

はじめに

1. 中国東北の近代教育のはじまり
  - (1) 奉天省の場合
  - (2) 吉林省延吉県の場合
  - (3) 私塾と近代学校
2. 間島の私塾と近代学校
  - (1) 延吉県の私塾
  - (2) 近代的学校体系
  - (3) 近代的教育をもたらしたもの

おわりに

キーワード：中国東北、朝鮮族、近代学校、  
私塾、間島

### はじめに

今日の教育は国際化の中にあると言われる。従って教育を見るときに一国の中だけで教育の姿を追うのではなく、多くの民族の交錯する間にこそ見据えてかからなければならないであろう。日本の歴史を振り返って見ると、明治の開国から大東亜戦争の敗戦に至までの時期は、日本の歴史の中でも最も多くの日本の庶民が他の民族と交錯し、交流した時であった。本論は日本や中国、朝鮮族の教育をそうした多民族が交錯した一コマの中に追おうとするものである。

かつて間島と呼ばれていた中国東北の延辺朝鮮族自治区は、朝鮮半島と国境を接していたために、多くの朝鮮族を受け入れてきた土地であった。中国東北地方への朝鮮族の移住はすでに十七世紀初頭からあったといわれるが、多くの移民を見るようになったのは中国清朝末期であった。特に多数の朝鮮族が移ったのは、一九〇〇年に義和団事件が発生したのにもなって、ロシア軍が東北地方へ南下した時であったという。<sup>(1)</sup>

朝鮮族の移住は、一方で清朝後半に大陸から東北地方へ移住してきた漢族との摩擦を引き起こし、間島が中国の領土であることを主張していた清朝と韓国との間に、国境をめぐる争いを引き起こすこととなった。そうした所へ、二十世紀初頭の日露戦争をきっかけとして東北地方に拠点を作ろうとした日本もこの間島の占拠を試みるようになり、二十世紀の間島では日本と中国、朝鮮族との間に様々な緊張関係が生まれたのである。こうして間島は、二十世紀初頭から一九四五年の日本の敗戦に至るまでの約半世紀の間、満洲国の時代を含めて、この三つの民族や国家が交錯する地域となったのであった。

世界中のどのような地域でも、複数の民族や国家が交錯するのは通常のことである。しかし

(1) 朝鮮総督府内務局社会課編「満洲及西比利亞地方に

於ける朝鮮人事情」 大正一二年八月

間島の特徴は日本人は日本から、朝鮮族は韓国から、漢族は中国山東地方からと間島の外に出身地を持つ民族や国家が進出し、交錯したという点にある。それぞれはいつも出身地への思いがあり、そのために間島に同化するよりも、それぞれの出身地の慣習を間島に持ち込む傾向が見られた。それだけに三者の間の摩擦はより激しいものとなった。本論は、こうした特色を持つ間島（延辺）の多様な文化の交錯する姿を、教育の側面から追いかけてみようとするものである。

二十世紀前半、間島の三つの民族と国家はそれぞれに闘争を繰り返していたが、同時にそれぞれはそれぞれの近代化という課題を抱えていた。三者は近代化こそが植民地支配や欧米の圧迫から脱出する唯一の方法だと考えていたのである。日本の場合、日本の植民地支配は欧米に対する対抗意識に支えられていたから、その欧米の圧力に対抗するために強く近代化を必要としてたのである。朝鮮族は中国と摩擦を起こす一方で激しく抗日運動を戦っていた。しかしその抗日運動への意識は、間島各地に作られた数多くの学校で行われた教育によって支えられていた。そしてこれらの抗日学校でさえ伝統的な教育により支えられていたわけではなく近代的な教科を積極的に取り入れ、時には日本の学校の近代教科の教科書を翻訳して使うことさえあったのである。このように抗日運動に奔走した朝鮮族も近代化を強く求めていた。中国も、日本の中国進出にさまざまに抵抗する一方で、日本に多数の留学生を送って近代的知識の吸収に努めていた。東北の留学生についての研究は大陸の場合のように進んではいないが、しかし大陸に劣らず多数の留学生をかなり以前から日本に送っていたことも確かである。こうして中国東

北の抗日運動と近代化の動きも、一つの根から生まれていたと言うことができる。植民地支配と抗日運動については、日本と中国や朝鮮族では見据える方向が正反対であったが、近代化を求めるという点では共通のものがあった。本論ではさらにこの近代化を求める動きに着目する。

その近代化はどのように展開したのであろうか。まず近代的な学校の初期の展開について簡単に見てみよう。

中国の近代学校の出発は一九〇四年一月の奏定学堂章程（癸卯学制）にあると言われるが、この間島ではこうした大陸の近代化への動きに素早く反応していた。すなわち同年中に延吉庁の陳丞作彦は延吉に中学校を組織し成立させたという。<sup>(2)</sup>（これは後に第一初高等小学校となる。）これが間島における中国側近代的学校のはしりであった。次いで一九〇九年には、頭道溝に延吉第五初高等小学校、銅仏寺に延吉第四初高等小学校が作られ、これをきっかけとして十年から十一年にかけて引き続き多数の近代的学校が作られる。そしてこれらの学校を基礎として住民全体を対象とする近代的学校体系が組織される一方で、さらにこれらの学校は近代的教育内容を吸収し、それを其他の教育機関に広めて行くのである。

間島が朝鮮半島の影響を強く受けていたことを考えると、朝鮮族の近代的教育を目指した教育機関はかなり以前からあったのではないかと思われる。しかし、後の朝鮮族の近代的学校や抗日運動に大きな影響を与えたという点では、やはり瑞甸義塾（一九〇六年）を上げなければならないだろう。この学校がことば通りの近代的学校であったかどうかは疑問であるが、「新学教育的開端」<sup>(3)</sup>であったことはほぼ間違いない

(2)「延吉県志」巻七教育 民国三年 延吉県档案馆  
(3)武強編「東北淪陷十四年教育史料 第三輯」 一九

九八年八月 吉林教育出版社 三二七p

いだろう。これに続いて朝鮮族の近代的学校の出発点になったのは、一九〇八年に明東村に設立された圭巖齋である。<sup>(4)</sup> これは後に明東書塾、次いで明東学校となったもので、近代的教科を教え、近代的学校体系を整えようとしたという意味で重要なものであった。

これらに対して日本が間島に最初に作った近代的学校は、一九〇八年七月に龍井で開校式を上げた間島普通学校、後の間島中央学校である。<sup>(5)</sup> この他に当時日本の統制下にあった教育機関としては補助書堂が幾つかあったが、それらは近代的学校と言えるものではなかったし、また後に影響を与えるものでもなかった。この間島普通学校に次ぐものは一五年に設置された局子街分校、後の局子街普通学校、一六年の頭道溝分校、後の頭道溝普通学校である。こうした間島普通学校を初めとする日本の設立した学校は、その当初から近代的教育内容を持っていたが、しかし近代的な学校体系を生み出すことは満洲国時代後半までできなかった。その意味でかならずしも近代学校と言うことはできないが、間島に近代的な教育内容を持ち込んだことも確かである。

以上の経過を見ると間島における三つの民族、国家に関係する近代的学校の始まりは、一九〇四年から一九一〇年前後の間のことであることがわかる。従って二十世紀初頭のこの時期は、近代的学校の始まる時期として非常に重要であることがわかっていく。本論はこうした意味でこの時期の間島を主題とするものである。

しかし近代化と言っても、幾つかの近代的学校がそのまますぐに間島の教育近代化を意味すると言うことはできない。特に朝鮮族や中国の

漢族は移住と同時に多数の儒教を基礎とした旧来の教育機関を間島に持ち込んでいたから、そうした旧来の教育機関をどのように近代化させるかという課題があった。旧来の教育機関に代えて近代的学校を建設して行くのも一つの方法であるが、それは経済の側面から見ても効率が悪い。そうなれば旧来の教育機関に近代的教育内容を導入して、さらにそれを近代的学校体系の中に組み込むことが効率的であろう。こうして旧来の教育機関、私塾をどう近代化して行くかという問題が出てくる。本論では間島の近代化という観点から、旧来の教育機関、私塾がどのように展開したかという問題を見て行きたい。

## 1. 中国東北の近代教育のはじまり

### (1) 奉天省の場合

先に述べた奏定学堂章程（癸卯学制）の制定は、東北地方の学校教育に大きな影響を与えた。その結果それまでの科举体制を支えていた書院や私塾に代わって近代教育を目指す学堂などが新設されたり、旧来の教育機関が新しい教育機関に切り換えられるなど、東北各地に急速な変化が見られた。奉天省蓋平県では一九〇五年に最初の近代化を目指す学校である師範伝習所を作ると、早くも一九〇六年には旧来の教育機関に代わって小学校を五〇校、翌年の一九〇七年には九三校、〇八年に二六校を作る。この数字は二五年後の一九三〇年に存在した約四百校の小学校のうちの四〇％以上が、この三年間に作られていたことを意味する。<sup>(6)</sup> 鉄嶺県の最初の学校はやはり一九〇五年に設立されているが、〇八年までに総計七八校が設立されていて、こ

(4) 李智澤『北間島』 「アジア公論」 一九七三年三月

(5) 間島普通学校、間島中央学校「間島普通学校沿革誌」

大正元年九月編成

(6) 「蓋平県志」 『教育志巻五』 民国一九年

の場合も一九三〇年の三〇％以上を占めていることがわかる。<sup>(7)</sup> この二県が東北の全てを代表するわけではないが、しかし二県の近代化へ走ろうとする姿は、当時の東北の近代化への姿勢を代表していることもまた事実である。

中国東北では一九三〇年前後にたくさんの「県志」が編纂されている。そしてそのほとんどの「県志」が近代的学校の必要性を「国家の隆盛衰退は教育の善し悪しにある。人材が豊になるのは良い学校をたくさん作ることにある。」というように論じている。<sup>(8)</sup> 国の盛衰という言葉は編纂者が使う思いの裏には、植民地支配の下にあった当時の中国の姿があり、彼等の独立への気持ちがあったことは間違いない。彼等は国家の独立には欧米の近代科学の成果が必要であり、それを教える近代的な学校がなくてはならないと強く考えていた。この「県志」の編纂者だけでなく二十世紀初頭に学校の設立に走った人々の意識の中にもそうしたものがあつたであろう。だからこそこの時期に、旧来の教育機関でない多数の新しい学校を一気に作ろうとしたのである。

だが国家の隆盛を思っても、それがすぐに近代的な教育につながるものではないことも明らかであろう。まず一九〇五年を契機に作られた学校の中には旧来の教育機関である書院や私塾を引き継いだものがかなりあつた。<sup>(9)</sup> 例えば

「綏中県志」には両等学校の歴史が書かれている。それによるとかつて綏中県には綏邑曩無書院があつたが、一九〇四年に科挙が廃止になったことをきっかけにしてその書院の中に官立学堂が建てられた。これが後に両等学校になる。その官立学堂の校長は経営に大変努力して、教育のために教科書だけでなく「儀器標本經史子集九通百家叢書類書」といったものを手を尽くして購入したという。例えば「儀器標本」としては力学天秤、発電機、望遠鏡、電池、音叉、杉松科植物標品、地衣類植物各種標品など百余種の近代科学を知るための重要なものを購入していた。だがその一方で、買い込まれた六〇種にわたる書籍の大部分は、周礼註疏、公羊伝註疏、李太白集、漢魏叢書、朱子全書、春秋大事表、司馬文正公集、皇朝通志などのような儒教に関するものや、歴代の中国の王朝史に関するもの、伝統的な儀礼や考え方を記したものなどであった。<sup>(10)</sup> つまりこの官立学堂には近代的な科学の成果と伝統的な中国王朝を支えた精神とが併存していて、とても近代的な学校とは言える状態ではなかった。

近代的なものと伝統的なものが併存するとはいっても、近代的なものを目指そうとする意向ははっきりしている。例えば一九二七年刊行の「通化県志」によれば、当時の教科目として中学では、修身、国文、英文、歴史、地理、数学、

(7)「鉄嶺県志」『卷五 教育』大同 年 民国 陳徳懿纂

(8)国家之隆替恒視教育之良窳人材之蒼萃端資学校之培養蓋教育為立国之本而学校乃人材所從出也 「訥河県志」『卷六 教育志』民国二十年 民国 叢紹卿纂

(9)鉄嶺県の銀岡書院などがその典型であろう。同書院の中には小学堂が作られただけでなく、銀岡書院そのものが鉄嶺勸学所になり地域の教育の指導機関になった。近代的であるはずの学校の教育が旧来の教育を受け継いでいたのである。

前掲「鉄嶺県志」

また「錦県志」には道光二一年（一八四一）に作られた凌川書院が科挙廃止後に勸学所、師範学校そして第四高等小学校に改変されていったと記してある。

「錦県志」『卷八 教育下』民国十年 民国 陸普格等纂

「梨樹県志」（一九三四）その他にもこうした記述は多い。

(10)「綏中県志」『卷五 政治教育』民国一六年 范炳勲等纂

博物、物理、化学、法制、経済、図画、手工、音楽、体育などを設定していて、高級小学では、修身、国文、算術、歴史、地理、理科、手工、図画、唱歌、体育、英語で、これに男子は農業、女子には家事が加わえられたという。<sup>(11)</sup> 実際に当時これだけの教科目を教授できたのかどうかは疑問なしとはしないが、少なくとも学校でこうした近代的教科目を教えるのが望ましいと考えていたことは間違いないであろう。そしてこの考え方の傾向は清末の学校においても同じであったと思われる。

清末民初の東北の教育内容が近代化を目指していたことは述べたとおりであるが、だからと言って学校の体系が即座に近代化したとは言えない。学校体系の近代化とは、一つは一貫した学校体系になっていたかどうかであり、もう一つは国民全体を対象とした学校体系ができたかどうかという点にある。

一貫した学校体系とは、初等教育から始まって順次中等教育、高等教育と進学できる体系である。その点で言えば東北の初等教育機関や中等教育機関が高等教育機関に結びつくには少し時間がかかった。それは第一に高等教育機関の整備の遅れにあった。東北の中心都市である奉天を見れば、奉天師範学堂が一九〇六年に開学し、これが瀋陽高等師範学校になるのが一九一七年で、さらにこれが東北大学になるのが二三年である。この間一年に私立医科専門学校、一二年に外国語専門学校ができるが、学堂章程の制定から各地の初等教育機関が急増したことから比べれば、東北の高等教育機関が整備されるのはかなり遅れたと言う事ができるだろう。

これら高等教育機関が整備されるまでは、〇六年に遊学予備学堂がつくられ、<sup>(12)</sup> 県志に「選送学生東洋留学」などのことばがあるように、<sup>(13)</sup> 欧米あるいは日本への留学が東北の高等教育の代わりをしていたと思われる。

中等教育機関は都市に作られたものと地方に作られたものに区分できよう。都市に作られたものとして早いものは、一九〇五年に奉天に作られた普通学堂（後の奉天省立第一高級中学校）、〇六年の奉天高等実業学堂、一〇年の東辺林科高級中学校（安東）、一四年の第二高級中学校（錦県城内）などで、特殊なものとしては〇四年日本の軍政署が営口に作った第一商科高級中学校がある。しかしこれらは都市中心の教育機関であり、エリートのためのものであった。これに対して地方に多数設立されていた中等教育機関は初等教育機関の延長として設立されたもので、地方の学校教育の発展に大きな意味を持つものであった。だから一九三〇年に開催された第二回全国教育会議で「中小学教育当以県為中心」<sup>(14)</sup> という決議が出てきたのであろう。ともかくも都市の中等教育機関は、地方の中等教育機関と区別され、地方の初等教育機関と強い結び付きを持つものではなかった。

地方の中等教育機関は最初は中学校として設立されるものは少なく、多くは教員養成系の学校として現れた。しかも多くは初等教育機関の急速な設立と平行して作られたもので、地方の初等教育機関への教員の供給を目的としていたと思われる。この教員養成機関はそのまま教員養成機関として発達するものもあったが、中には中学校に転換し、高等教育へつながる中等教

(11)「通化県志」『卷三 政事教育』 民国一六年 民国 邵芳齡等纂

(12)「奉天通志」『卷一五二 教育四 近代 近代教育上』

(13)「義県志」『中卷八 学制志』 民国二〇年 民国 王鶴齡等纂

(14)前掲「奉天通志」



育機関になる場合があった。例えば海城県では一九〇五年に他山書院を引き継いで簡易師範学堂が作られたが、〇七年にこれに中学課程が付設され、それが後に海城県立初級中学校になっている。<sup>(15)</sup> また海龍県では〇六年に高等小学堂が作られ、翌年これが予科中学堂に改められている。<sup>(16)</sup> しかしいずれの場合でも地方の初等教員養成学校は短期間で教育が完成するコースを前提にしているから、より高度な教育へつなげる要素はどちらかと言えば少なかったと見るべきであろう。

都市を中心とした学校体系と地方農村部に地盤を持つ教育体系の対立は、地方の初等教育から都市の高等教育への一貫した学校体系を阻んでいた。さらに言うならば、同じ県内の初等教育機関でも、県立であるか区立、郷立、村立、私立であるかによって質的な差があり、すべてを取り込んだ一貫した学校体系ができにくい状態があった。

一九一五年四月に教育部は「義務教育施行政程」を公布している。この時点で全国に義務教育の施行を宣言したのであるから、東北の学校体系も東北の住民全体を対象とするという近代的な原則を主張したと言うことができよう。こうして東北は近代的な学校体系をスタートさせることになったのである。

しかし例えば「瀋陽県志」<sup>(17)</sup> には、一九一六年の場合、県内に四五四の私塾があり、その私塾に一三三六名の生徒がいたと記されている。「綏化県志」<sup>(18)</sup> では一九二一年に三五の改良私塾があり、六八六名の生徒がいると記している。この数字から推測すると綏化県にはこの他にもっ

と多くの未改良私塾があったと思われる。さらに吉林省雙城県では二六年に私塾二二九カ所、生徒は三九三七名と報告している。<sup>(19)</sup> こうして見ると「義務教育施行政程」が公布されてもお学校体系の中には入らない教育機関がかなりあったことが分かる。従って教育行政当局の仕事として、こうした学校体系に入らない教育機関をどのように排除するか、またはどうやって学校体系に組み込むかということが出てくる。すべての未就学児童を学校体系の対象にすることとともに、こうした学校体系に入らない教育機関をどうするかも教育の近代化の課題なのである。

## (2) 吉林省延吉県の場合

吉林省延吉県は漢族と朝鮮族が混在する地域である。そのために両者共に同じように近代化を目指していても、漢族と朝鮮族ではことばが違い、そのために教育機関の内容にもそれなりの違いがある。延吉県は中国の領土であるから中国の制度が優先するはずだが、それぞれの教育の内容については両者が一致するとは限らない。近代学校の条件は、一貫した学校体系を持つこと、国民全体を教育の対象とする組織を持つことの二点と共に、教育内容としては標準語の教育が行われること、近代科学に基づく近代的教科が教えられることなどが上げられよう。ここではそうした側面についても注目したい。

延吉県で組織だった制度を前提とした教育機関、即ち学校が最初に作られたのは、一九〇四年のことで、延吉の北山に作られた第一初高等小学校（最初は中学堂、一般には北山小学と呼

(15)「海城県志」『巻二』 康德四年 満洲 威星巖等纂

(16)「海龍県志」『巻六 教育』

(17)「瀋陽県志」『巻四 教育』 二〇葉

(18)「綏化県志」『巻五 教育志』 民国一〇年 民国 胡鏡海等纂 三六～三七

(19)「雙城県志」『巻八 教育志 第三冊』 民国一五年

ばれる)であるという。<sup>(20)</sup> 初めこの学校は必ずしも完備したものではなく、運営面でもさまざまな問題を抱えていたようである。しかし〇九年に第五初高等小学校(頭道溝)と延吉第一初等小学校(朝陽河)が作られ、次いで一〇年に第二初高等小学校(北山)など六つの小学校が作られると、その結果一四年には総計一三校となったが、このころからようやく延吉では組織的に整った学校制度ができたと言えるようになった。<sup>(21)</sup>

中等学校として最初にできたのは一五年八月の道立第二中学校である。<sup>(22)</sup> そしてこの段階で延吉の初等教育は中等教育に結びつき、一貫した体系となっていたと思われる。それは前掲「延吉県志」に掲載されている延吉県の学校の全教員の一覧表から推測される。そこには一名を除いて全員の簡単な履歴が書かれている。履歴の書いてある者は総員で四三名であるが、その内訳は師範学校出身者が二八名、農業関係学校出身者が六名などとなっていて、実は全員が中等教育関係学校の出身である。このように初等教育の教員は初等教育や他の教育機関の出身者ではなく、中等教育学校で修学した者であるという前提ができあがっていることが分かる。言い換えるならば初等教育の上には中等教育という段階があり、小学校の次にはより高度な中学校という学校体系があるという意識が人々の間にできあがっていることを示しているのである。

初等教育学校はすべての人が通うのが当たり前という意識、初等教育を受けたら中等教育、

その上に高等教育があるという意識、それが近代学校制度を支えている。それに対して、初等教育を受けた人は高等教育を受けない、高等教育を受けるのは特別な人々のみであるという従来からの複線型学校体系の意識がある。日本の江戸時代を例にとれば、初等教育の寺子屋へ通う人々と、高等教育の藩校へ通う人々は違うのだという複線型学校体系の意識である。その複線型の意識がここに示すように中国東北でも少しづつ崩れて、単線型学校体系の意識が生まれてきていたのである。

しかしここに示されている延吉の学校の数は全部で一三校だけで在籍生徒の数も八七七名である。この在籍生徒だけでなく学齢児童全体に広げて見ると、延吉県で漢族は三一二人、朝鮮族で四七七一人と集計されている。この学齢児童の中で入学したことのあるものは、漢族で八四七人、朝鮮族で一七三一人となっている。<sup>(23)</sup> この数字で単純に就学率を計算すると、漢族は二七%、朝鮮族で三六%ということになる。しかし就学率を学齢児童に限らずさらに住民全体に広げれば就学率はもっと低いものになるだろう。こうした状況を見ると住民の間に学校という意識が十分に浸透しているとは言い難い。まして学校が一貫した体系を持っているとか、すべての人が学校に行くのが当然とかの意識は、あったとしてもごく一部の人のものであるろう。むしろ学校はエリートの行くところで一般の延吉の住民とは関係があまりないと思われていたに違いない。

さらに言うならば、「延吉県志」によって延

(20)「間島事情」 東洋拓殖株式会社 大正七年三月  
によれば同校は一九〇一年の創設であるという。目下のところ同書の根拠ははっきりしないが、東北各地の場合のように、奏定学堂章程(癸卯学制)の制定に合わせて学校を設立したのではないかと考えると、〇四年が正しいと思われる。

(21)前掲「延吉県志」

金白奎、崔長録、黄昊雲『延辺最早的官辦学校』  
「延辺文史資料 第五輯 教育史料專輯」 延辺政協  
文史資料委員会 一九八八年一二月

(22)前掲「間島事情」

(23)前掲「延吉県志」

吉第四初高等小学校（六道溝）の沿革を見ると、一九一一年に延吉の商埠局長がその当時あった朝鮮族の私立学校を接収して作ったとある。また延吉第三初等小学校（朝陽川）の場合は郷紳の史聯捷が、これもその当時の私立の塾を改良して学校にしたものとある。<sup>(24)</sup> こうした記述を見ると当時の人々の意識では学校と私塾の間にそれほど大きな差がなく、むしろ私塾を改良すれば学校になるといった程度のことを考えていたように思われる。こうして私塾と近代学校の間に差がないとすれば、この時期の延吉には近代的学校を支える組織と意識が十分にできあがっていないとすることができるだろう。

### (3) 私塾と近代学校

前述のように奏定学堂章程（癸卯学制）は、中国東北における私塾・書院教育体制から近代的学校制度への転換点になったといえる。だがその転換は急激なものではなくそれから時間をかけてゆっくり変わっていったように思われる。

漢族の私塾のについて言えば、この当時「延吉塾師伝習所」があって地域で標準化した教育を行おうとしたように、既に単に個人的な私塾教育ではなく地域全体にわたる組織的な教育だという意識が出てきていた。また私塾であっても、できるだけ近代的な教科目を取り入れて塾教育を改良したいと考える人々がいて、中には国文、修身、算術、体操などを教えていたところもあった。そうした一部の私塾を改良私塾と呼んでいる。もちろんすべての私塾で近代的教科目が教えられた訳ではない。いや改良私塾でさえも国文、修身では四書五経が中心であったという。言うならば改良私塾とは、旧来の教

育に多少の近代的教科目が付け加えられただけのものであった。朝鮮族の私塾の中にも改良私塾が存在していて、そこでは国文、修身、歴史、地理などが教えられていた。しかしその大部分は「韓国之旧書」を使っていて、「改用中国部定小学教科書」を使うものは多くなかったという。<sup>(25)</sup> つまり朝鮮族には朝鮮族独特のことばの問題があったにしても、教育の事情は漢族の場合と同様であった。

私塾のシステムは学校制度とは別のものである。一貫した学校体系の中に組み込まれているわけでもなく、私塾の狙いがすべての国民を私塾のシステムの中に取り込むことにあるというものでもない。私塾はただ個人的な要求に従って作られ、それだけで完結しているものである。そうした私塾と学校を大きな差異のあるものと意識していなかったために、私塾をどの様に近代的学校制度に取り込むかがこの時代の行政の課題になった。だから例えば前述のように私塾を学校に改変しようという試みがあったのであるし、学校制度の中に取り入れようとする僅かな努力が、ある場合には塾師伝習所として出てきたり、改良私塾としてあったのである。

近代学校の成立は国民統合の成立と平行するものである。近代国家には一つの領域（国境）の中に住む人々を同一の国民として認定し、かつ住民に自分たちは国民であることを意識させることが求められる。だから近代国家の成立にとって国民統合の作業は欠くことができないものである。しかし国民統合の作業にとって、私塾のような教育システムは何ほどの意義も持っていない。だから日本の場合、江戸から明治の国民国家成立の時に寺子屋が廃止され、学校が新設されたのである。もちろん寺子屋が学校に

(24)前掲「延吉県志」

(25)前掲「延吉県志」



改変された例がないことはないが、それは寺子屋を利用して学校が設立されたのであって寺子屋として残されたのではないことは明らかであろう。中国にとって二十世紀前半は国民国家を成立させる作業の続いた時期であった。それを教育の面から見れば、近代学校の成立して行く過程であり、旧来の私塾書院の教育体制が廃止され、ある時は近代学校制度の中に吸収されて行く過程でもあった。

こうした中国東北にあった動きを、先走って歴史の流れによって見てみると次のようになるだろう。一九一〇年前後は近代的学校の動きが始まった時である。二〇年代は中国の国民統合への動きと朝鮮族の民族主義が摩擦を起こした時期である。三〇年代は満洲国による日本の支配の下で教育の統合が試みられた時期である。日本の敗戦からは中国による国民統合が、学校制度を通して作り上げられた時である。近代化はすべての国民にとって共通の意識、平等の意識を作り出すものである。従って共通と平等を前提とする国民統合にとって近代化は重要な要素である。近代化の意識が普及してこそ国民統合への歩みが始まる。私塾から近代学校への動きはそうした意味を持つ。

## 2. 間島の私塾と近代学校

### (1) 延吉県の私塾

中国吉林省延吉県档案馆の所蔵資料の中に「延吉県学齡兒童調査表」という一束の資料<sup>(26)</sup>がある。その中に「吉林延吉県私塾調査表」(民国三年八月一四日)という冊子が入っている。これは一九一四年八月に、恐らく当時の延吉庁が延吉県の私塾を調査したものをまとめた

ものと思われる。以下ではこの私塾調査表を使って当時の間島の中心であった延吉県の私塾の状態を述べてみたい。

この私塾調査表では私塾を華民と墾民とに別けている。華民とは漢族のことで、墾民とは朝鮮族のことを示している。言語の問題があるのだろうが当時の私塾は華民と墾民とに分かれていたのである。

まずその華民の私塾について見てみよう。延吉県の全体は志仁郷、勇智郷、守信郷、尚義郷、崇礼郷、春陽郷の六つに分けられているが、華民の私塾は志仁郷で五、勇智郷では十、守信郷では一二、尚義郷八、春陽郷二と記されている。これに対して崇礼郷の場合は記されていない。崇礼郷で墾民の私塾の調査は行われていることを見ると華民の私塾の調査が行われなかったとは考え難い。恐らく崇礼郷には華民の私塾がなかったと見るのが自然であろう。以上をまとめると延吉県の華民の私塾の数は総計で三七となっている。

これに対して墾民の私塾は、志仁郷で二八、勇智郷三五、守信郷二三、尚義郷一三、崇礼郷一、春陽郷二の名前が記されていて、総計で一〇二になる。数の上から見れば華民より墾民の私塾の方が多く、それも三倍に近い。延吉県では華民に比べて墾民の人口が多いことを考えても、なお墾民の私塾の多さが目に付く。

さらに生徒の数を見てみよう。生徒の数から言えば華民私塾が総計で三一五名、墾民私塾では一六三五名である。華民と墾民の生徒数を比べて見ると墾民私塾の方が五倍以上である。このことから墾民すなわち朝鮮族は全体として教育に熱心であったと言える。

私塾の規模について見ると、華民私塾では最

(26)「延吉県学齡兒童調査表」 延吉県档案馆 二一—

大のもので生徒数が二三名である。これに対して墾民私塾では志仁郷小営業子にあった私立光成学校が一三七名の生徒を擁し最大であった。また臥龍洞の私立昌東学校も一一四名であった。この二つは墾民私塾の中でもず抜けて大きいのだが、その他墾民私塾で二〇名以上の生徒を擁するものを拾い上げてみるとその数は二四となって全体の四分の一近くに及ぶ。華民のものが最大で二三名であるという状態を見ると、華民私塾と墾民私塾との規模の差は大きい。

墾民私塾に規模の大きいものが目立つ。しかし華民、墾民含めて全体を見るとかならずしもそうばかりとは言えない。華民私塾の場合は全体の七割近くのもが十名以内の規模であるが、墾民私塾の場合もやはり六割強がそうである。言うならば私塾の大部分は十名以内の小規模なものであった。従って私塾一般としては、墾民私塾に大きなものがあったにしても、華民私塾の場合も墾民私塾の場合もほぼ似た状態であった。このように延吉県全体には小規模な私塾が広範に広がっているようには見えるが、そこには少しづつ変化が始まっていることも読み取れる。以下ではそうした変化について述べてみよう。

これまで「私塾調査表」に記載されていたものを一括して私塾として論じてきたが、実は「私塾調査表」ではその私塾を大きく三つに分類している。一つは「自設私塾」、一つは「家塾」、もう一つは「私立学校」である。このうち小規模私塾のほとんどはこの中の「自設私塾」に分類され、比較的規模の大きいものは「私立学校」になっている。しかしだからといって自設私塾と家塾、私立学校の間にどのような区分があるのか、本表でははっきりと定義しているわけではない。推測するならば、おそらく家塾とは家族ないし親族の子弟を収容している小規模

な塾を意味しているものであり、自設私塾とは血縁とは関係なく一般の子弟を収容する塾を指すのであろう。しかしその一方で、私立学校には先に述べたとおりかなり大きなものがあるが、そうしたものを除くと全般的には規模の面でも自設私塾、家塾などとそれほど差があるわけではない。

本表には私塾ごとに教授している教科目が記してあるが、私立学校に分類されているものと自設私塾、家塾との間に差があるとすればむしろそうした教育内容についてである。以下ではその教育内容の違いに注目して見てみよう。

志仁郷の華民私塾は全部で五つの名前が記載されているが、そのうち自設私塾が四、家塾が一となっていて私立学校は記されていない。ここに掲げられた自設私塾の教科目を見ると、ある自設私塾は中庸・大学・論語・国文と記されていて、別の私塾は国文・修身、また孟子・論語、あるいは国文・論語となっている。また家塾の場合は孟子・三字経・論語であった。こうして見ると自設私塾と家塾の間に教育内容面で特別な区別はないように思われる。また墾民私塾について見ると、同郷の河東にあった墾民の自設私塾で教えられていたのは百聯句・唐音・古文・真宝・文林であり、長春溝の自設私塾では前集・千字・唐音・童蒙先習、依蘭溝にあったものでは孟子・新千字・三字経となっている。こうして見ると自設私塾の教育内容では華民と墾民の間に差はなく、それぞれ科挙試験以来の伝統的な教科目を採用していたことが分かる。

次に私立学校について見てみよう。私立学校には華民私立学校はなくすべて墾民のものである。この墾民私塾の私立学校ではその教育内容が自設私塾や家塾と大幅に異なる。志仁郷の私立玉成学校で教えられていたのは小学・歴史・理科・地理・算術・金経（キリスト教聖書）・

修身であった。私立養貞女学校では小学・修身・金経・歴史・地理・理科である。私立光成学校では漢文・修身・外語・地理・博物・理化である。自設私塾が伝統的な教科目を中心とする教育機関であるとする、ここに見るように私立学校は近代的教科目を重視した教育機関とすることができるだろう。もっともその中には漢文や小学のような伝統的な教科目が挟まっている場合もあるし、自設私塾の教科目との中間のようなものもないではない。例えば依蘭溝の私立学校である私立音成学校の教育内容は、漢文・歴史・修身・算術・千字・文林となっている。しかしこの場合は漢文・千字・文林などの伝統教科の外に、歴史・算術のような近代的教科目が含まれていることが学校という名前に値するものとして評価されたのであろう。

この私塾調査表から分かることは、延吉県には、中国の公的権力によって作られた教育機関以外に、民間の私的な力によって作られた私塾と呼ばれるたくさんの教育機関があったということである。そしてその大部分は自設私塾や家塾に分類される伝統的な教育機関であった。しかしそうした教育機関とともに、延吉県ではその内の二割強（三四）の教育機関が私立学校に分類されるものであった。この私立学校は以上に述べたように近代的な教科目を教授するものであった。私塾という伝統的な教育機関の間でさえもこうした近代的な教科目を教育する機関が出てきたことは、当時の延吉県の教育全体が伝統的なものから近代的なものへと変化し始めたことを示すものであろう。

しかしその近代化を示した教育機関である私立学校は華民の私塾ではなく、すべて墾民のものであった。そのことは延吉県における教育の近代化が、中国の教育の近代化への動向の影響から始まったのではなく、朝鮮半島から移住し

てきた朝鮮族のもたらしたものであることが推測できよう。この教育の近代化は、多様な教科目の間に「金経」（キリスト教聖書）の教科目があるように、一つは朝鮮半島に来ていたキリスト教宣教師たちの活動の影響があったことは間違いないだろう。しかしもう一つ言うならば、間島へ移住してきた朝鮮族そのものに教育を近代化したいという強い意欲があったと思われる。恐らくその意欲は、一九一〇年の韓国併合などに象徴される亡国を回復したいという意欲、民族の独立への強い意欲につながっているのではないだろうか。

しかし朝鮮族の教育がいかに先進的であっても中国の領土である間島で、無制限に朝鮮族独自の近代的教育を展開するという訳には行かない。近代化が進めばいずれ中国領土で国民の統一が試みられることになるだろう。そうすれば遠からず間島でも中国語への言語の統一が求められ、中国語の学習が必要になってくる。その時に朝鮮族の教育としては独自の言語教育だけでなく、中国語の教育をどのようにするかという問題が出てくる。いや既にこの時期にこれら言語の問題が起っていた。すなわちこれらの私立学校では中国語を教科目として置こうとする試みが始まっているのである。

例えば勇智郷の六道溝街（後の龍井）に私立明信女子学校と永信小学校、発郷小学校がある。それぞれ明信には三四名、永信は四九名、発郷六三名の生徒がいてそれなりの規模を持つ学校であったが、それだけでなく教科目もかなり近代的なものをそろえていた。明信では金経・初等小学・修身・歴史・算術・針工・体操・地理・理科が教授されていた。永信では金経・修身・小学・地理・歴史・体操となっている。発郷は修身・理科・地理・歴史・図画・体操となっている。そしてその教科目の他にそれぞれの学校

で「中語」が架設されている。これらの学校の特色は近代的教科目とともに「中語」(中国語)の教育が行われていることである。

近代国家はバラバラの住民を統一して国民を創造しようとする。すなわち教育によって国民としての統一意識を持つ人々を創造するという作業を行うが、そのためにまず言語の統一を試みる。実際に中国も間島に移住してきた朝鮮族に対して繰り返して同化することを求めてきたし、このために中国語を話し、中国服を着た朝鮮族がいたことは様々な報告書に出ている。そのことから考えるならば、一つにはこれらの学校が中国当局の圧力を感じて「中語」を教科目としたということができよう。もう一つは、例えば明信と永信は後の間島の中心的な近代的学校になるのであるが、そのことから中国に生きなければならない朝鮮族の生徒の教育として、近代的教科目とともに「中語」を選択したとも推測できる。

「中語」の教育を行うことは国家からの圧力であれ自らの選択であれ、中国への同化という点では同じ道である。そしてこの同化という道はただ中国化するという意味ではなく、朝鮮族の上に中国国民という新しい範疇が作られて行く近代化の過程であった。

私塾の側面から見ると延吉県の教育の近代化はむしろ朝鮮族の方から始まった。もちろん華民私塾の方に全く動きがないというわけではない。例えば守信郷の東古城子では任冠武が「改良私塾」を経営していた。これは男子二〇名、女子三名、合計二三名の生徒を収容するもので華民私塾としては規模の大きいものであるが、教科目として国文・修身・算珠を教えることになっていた。家塾や自設私塾のように旧来の大

学・中庸・詩経・論語・孟子・三字経といったものを教えることを止めて、数は少ないが近代的教科目に近いものを採用していた。その点で私立学校とまでは行かないが、改良私塾とされたのである。改良私塾というのはこの調査表では唯一の例だが、華民私塾の方でも近代化への動きが出てきていたことを示すものであろう。

## (2) 近代的学校体系

教育の近代化とは先に述べたように近代的な教科を教えるだけでは達成されるものではなく、近代的な学校体系と国全土に及ぶ学校組織が必要である。実はこの近代的な学校体系、組織を作ろうとする動きも間島にはあった。例えば延吉档案館所蔵文書の中に「一件拋朝鮮人金炳謙等呈請設立中学堂情形由」(宣統二年九月)がある。<sup>(27)</sup> これは当時の間島地方の中で最も経済的に繁栄していた街村であった琿春の烟筒磊子に住む金炳謙等が、中学を作ろうとして琿春庁に申請した書類である。学校名は鐘鳴中学堂、学生定員二〇〇名、就学期間は四年、学科は修身・中文・中語・地理・歴史・教育・格致・算学・天文・地文・生理・法学通論・経済学綱要・商業大要・農学入門・体操・音楽となっている。この学堂設立計画の特色は、一つは近代的な教科目を並べていることと実業的教科目を配していることである。この点はいずれも儒教圏にあった諸国では近代化する上で最も欠けていると考えられていたところであった。二つ目はこの中学堂に高等小学と初等小学を付設して、漸次進学する近代的な学校体系を考えていたことである。そして三つ目は朝鮮族の学校として朝鮮語を重視する一方で、中文・中語を教科目の筆頭に挙げたことである。そして最後に、発起人が

(27) 「一件拋朝鮮人金炳謙等呈請設立中学堂情形由」

宣統二年九月 字第一一七号 延吉県档案館

金炳謙と呉起煥、黄炳吉で、彼等は抗日運動や独立運動に力を尽くした人々であったことである。

この鐘鳴中学堂の名前がその後の記録に出てこないことから、恐らく認可されることはなく、実現には至らなかったのだらうと思われる。あるいはこの中学堂の建設が抗日運動の一環として見られるなどしてこの時期の間島では実現する条件が整わず、中学堂の企画としては早すぎたというのが正直のところかもしれない。しかしそれにしても、既にこの時期に朝鮮族の抗日運動や独立運動の間では近代的な学校体系が意識されていたのである。この点は評価しなければならないだろう。

### (3) 近代的教育をもたらしたもの

中国の開設した近代的学校だけでなく、間島の朝鮮族私塾の中にも既に近代的教育内容を持つものが現れていたのは前述したとおりである。だが間島に近代的教育を持ち込んだものがもう一つあった。それは日本の韓国統監府臨時間島派出所の指揮の下に設立された間島普通学校であった。この間島普通学校は設立に当たって派出所事務官の鈴木信太郎が中心となっていたが、その鈴木を名誉校長とし、川口卯橘を訓導として隆熙二年七月（一九〇八年）に開校した。鈴木が開校の辞の中で「間島ニ於ケル文明教育ノ模範ヲラシメンコトヲ期スル覚悟ナリ」と述べているように、従来の伝統的な教育ではなく近代的な教育を目指していた。すなわちその教科目は「一国ノ人民タル者ハ必ス一般ニ心得置クヲ要スル実用必須ノ学問ニシテ即チ人倫ノ大道ヲ教ユル修身、規律ヲ守ル習慣ヲ養成スル為ノ体操其他国語、漢文、日本語、算術、地理、歴

史、博物図画等ナリトス」であった。<sup>(28)</sup> これは前年に出された韓国の教育令に則ったものであるが、間島における日本の勢力が広がるに従ってそれなりの影響を持つようになった。例えば「沿革誌」によれば間島普通学校の生徒数は〇八年九月に五四名であったのが、「間島事情」<sup>(29)</sup>によると一四年に二二五名、一七年に三五〇名になっている。それなりに旧来の教育機関がある中で、しかも韓国を植民地化した日本の系統の学校にこれだけの生徒が集まったのは、ただ単に日本に心売る朝鮮族が多くなったと言ってもいいのではなく、日本の学校に近代的な教育を求める人々が多くなったからと見るべきであろう。そして事実、間島では抗日学校でさえも朝鮮で使われていた日本側の教科書を、翻訳したりあるいは編集して使っていたところが相当数あったと言われている。

間島普通学校はまもなく各地に分校を作り、前述したようにそれぞれ独立の普通学校に成る。さらに日本系の私立学校が作られ、それが満洲国時代に至までに間島地方の中心的学校に成長して行く。そうした姿からも分かるように、日本系の学校は近代的な教育の普及に大きな意味を持っていたのである。

### おわりに

二十世紀の初期に中国の教育も近代化へ動き始めるが、これと時期を同じくして間島の教育にも近代化が始まる。この時期の間島の教育には中国や日本の近代教育の影響は大きかったが、同時に朝鮮族の旧来からの教育機関である私塾の近代化のように自発的な歩みも無視できないものがあつた。ただ、近代的な学校体系や組織

(28)前掲「間島普通学校沿革誌」

(29)前掲「間島事情」 八一八頁



が現れるのは満洲国統治下まで待たなければならぬ。それも日本の統治によってできてくるのである。やがてそれは中国の統治へと解放された時に、改めて中国の国民教育体系の下に再

編成されて行く。間島の近代教育への歩みは二十世紀の初頭の私塾の動きの中に始まったのである。